

日本における所得階層別の栄養摂取と栄養素価格指数の長期的推計*

森口千晶 阿部修人 井深陽子 稲倉典子 **

本論文では、1981–2015年の『家計調査』を用いて所得階層別の栄養摂取状況と栄養素価格指数の長期的推計を行う。その革新性は、新たな統計データを用いて日本における栄養状態の社会経済的格差（「栄養格差」）を計測し、その長期的動向を初めて明らかにする点にある。また、栄養格差の決定要因として、エネルギーおよび栄養素1単位当たりの購入価格の動向を示す「栄養素価格指数」も推計する。推計結果によると、日本では高所得世帯ほど、①炭水化物からのエネルギー摂取率が低く、②タンパク質からのエネルギー摂取率が高く、③炭水化物に占める食物繊維の比率が高く、④カリウムに対するナトリウムの摂取比率が低いという点で食生活の質が高いが、同時に、⑤脂質からのエネルギー摂取率が高く、⑥脂質に占める飽和脂肪酸の比率が高いという点では、低所得世帯よりも食生活の質が低い。また、このような所得階層間の栄養格差は1981年から1995年まで縮小し、その後はほぼ一定で推移している。価格指数の推計によると、高所得世帯ほど栄養素1単位当たりの購入価格が高いが、どの所得階層においても三大栄養素の実質価格は顕著に低下している。栄養素価格の長期的趨勢に大きな所得階層間の差はないが、脂質については低所得世帯ほど価格の低下幅が大きい。

キーワード：栄養格差、健康格差、食事摂取、食品価格、価格指数

JEL Codes: I15 (health and economic development), E31 (price level), D10 (household behavior)

* 本研究は、一橋大学経済研究所・共同利用共同拠点研究助成（平成28–30年度）、一橋大学経済研究所・人文学社会科学データインフラストラクチャー構築プログラムオーダーメイド集計補助プロジェクト（平成30年度）「食品価格と栄養格差の実証分析」、およびJSPS科研費「食品価格と栄養摂取のマイクロ実証分析」（18H00864）の成果の一部である。

** 森口千晶（一橋大学経済研究所）、阿部修人（一橋大学経済研究所）、井深陽子（慶應義塾大学経済学部）、稲倉典子（大阪大学大学院国際公共政策研究科）